

「アーサー君、もう起きてーって、まだですか。まあ、その方が良いんですけどね」
ベーカー街222B。リビングに入った銀助は、長椅子で横になったアーサーを見て、ふう、と息を吐いた。

昨日から続く雨は昼前に止んだが、窓の外は相変わらずの曇天だ。時折雲の隙間から陽射しが差すものの、空では灰色のぶ厚い雲が蠢いている。

毛布にくるまったアーサーは、入室した銀助に気付くこともなく眠りこけていた。結局昨日はみんな夕食を取ったあと、徹夜して例の『お土産』の改造を完成させている。寝たのは夜が明けてからだ。連日ろくに寝ていなかったし、もう少し寝かせておいた方がいいだろう。

「……にしても」

銀助はちらりと、テーブルに着くそれに目をやる。

今朝、アーサーの様子を見に222Bのリビングに入って椅子に座るそれを見たときは、一階の自室を引き払うことを真剣に考えたものだ。いまは一応布を被せてあるが、その存在感と得体の知れなさは、かえって悪化しているかもしれない。

「……コナン君がルームシェアの解消を申し出る日も近そうですね……」

もっとも、「異様」なのはテーブルの椅子に座るそれが一番だが、「物騒」の度合いで言えばテーブルの上に並ぶあれこれも負けてはいない。アーサーの発明品の中でも、特に取り扱いに注意すべき物ばかりが所狭しと置かれている。

荒事になる、と昨日アーサーは宣言していた。

どうやらアーサーには、今回の一連の事件ー入り組んだ出来事の大筋が理解できたらしかった。まだ詳しい事は聞いていないが、顔を見ればわかる。先日までの迷いが綺麗に消えているのだ。

その上で、最終的には「戦い」になるから、そのつもりでいて欲しい、と銀助やクラウスに告げたのだった。

「……もう、頭から巻き込むつもり満々なんですからねえ……まあ、別に良いんですけど」
それでも、普段自覚なしに他人をあごで使うアーサーにしては、こんな風に素直に誰かに「頼る」のは珍しい。あるいは初めてのことかもしれない。クラウスなど、自分の立場ースコットランド・ヤードの警部という面目もあるだろうに、完全に私事としてアーサーに協力するつもりのようなだった。

かく言う銀助自身、口でどれだけばやこうと、結局はアーサーに助力する気であるのだ。コ

ナンを助けるために。また、アーサーの要請に応じるために。同じ屋根の下に暮らす同士とはいえ、赤の他人のイギリス人のために、である。

改めて考えると、実に自分らしくない。

だが、いまのアーサーにはーそしてコナンには——そうしたくなる何かがあった。

「……これは、ひと皮剥けちゃったのかもしれないね」

銀助はどこか小気味よさそうに言っ、長椅子で眠るアーサーを見やった。

「おっと。そう言えば……」

銀助はアーサーが改造した暖炉に近付き、《電気炉》に繋がる機器のひとつを確認した。

「やっぱり、反応なしですね」

最初は一時たりとも目を離すなど言われていたのだが、昨日の夕食時にアーサーは訂正し、何かあるとすれば夕方以降だろう、と言っていた。つまり、ここから先は注意する必要があるというわけだ。

「……壊れてたりしないですよね？」

「多分ね」

背後から掛けられた声に、銀助が振り返る。すると、アーサーが欠伸をしながら、長椅子の上で身体を起こしていた。

「あら。起こしちゃいましたか？」

「十分休ませてもらったよ。レストレード警部から連絡は？」

「特に何も。昨夜は平和だったみたいですよ」

「表に出てないだけさ。いまの情勢下で何も起きてないはずがない」

アーサーはそう言いつつ、のろのろと長椅子から離れてテーブルに移動する。椅子に座り、紙巻き煙草と灰皿を引き寄せ、自作の電気式ライターで煙草に火を付けた。

「はあ……結局ロンドンでは《ジャック・ザ・ナイトメア》とモリアーティとやらの一味が抗争を続けてるわけなんですね」

「ああ。けど、近々決着がつくはずだ」

「その決戦の場に乗ら込むんですよ？」

「……コナンはそこにいるはずだからな」

煙草を吸いながら、アーサーが答える。むむむ、と銀助は腕を組んだ。

「昨日、コナン君は無事だと言っていました、その意見はいまも変わってないですよ」

「ああ。『まだ』無事なはずだ。ただ、別の懸念は大いにある」

「なんですか？ 嫌な話なら聞きたくないんですけど」

「《ギアス》だ。おそらく、《ジャック・ザ・ナイトメア》の指揮官は《ギアス》を使う」

とんでもないことを、さらっと言った。銀助は「ええっ!？」と仰天する。

「待って下さいよ。《ギアス》はモリアーティの方でしょ?」

銀助はメリーウエザーに起きた「変化」を目の当たりにしている分、その危険性は理解している。あれが《ギアス》と呼ばれる超常的な力だという説明には眉唾ながら、警戒すべき能力であることは弁えていた。

しかし、その《ギアス》を、モリアーティではなく《ジャック・ザ・ナイトメア》の指揮官がというのは、あまりに唐突だ。

驚く銀助に、くわえ煙草のアーサーは説明する。

「僕は元々《ギアス》というのは暗示の一種だと考えていたが、そう考える至ったのは、この冬に起きた事件の関係者で、突然『人が変わった』人物が五人いたからだ。まず、クロエ・ノートンとウィリアム・クラム。それにロジャー・ステイプルトン。この三人を『変えた』のが——彼の話だとウィリアム・クラムに関しては直接的ではないようだが——モリアーティによる《ギアス》であることは、彼自身の口から確認している。問題は、残りの二人。ステイプルトン家のメイドと、ターナさんだ」

「ターナさん、ですか?」

「忘れたのか? 例の《ロンドン・キャット・コンテスト》のあと、彼女の身に起きた不可解な現象を」

「あ」

銀助は思い出す。あのあとあまりに色々とあり過ぎたために忘れかけていたが、会場から戻ったあと、このリビングで別人のような台詞を口にしたターナの姿は、はっきりと思い出せる。

「ターナさんの異変に気づけたのは、他でもない、モリアーティの警告があったからだ。それに、ステイプルトン家のメイドは、まず間違いなく《ジャック》のスパイとして活動していた。

つまり、この二人に『暗示』を掛けたのは、モリアーティではなく《ジャック》側の人間なんだ」

「し、しかし、モリアーティの暗示が《ギアス》だったからと言って、《ジャック》側の暗示まで《ギアス》だとは限らないでしょう?」

「……ちょっとした『ツテ』からの情報があってね。《ジャック》の指揮官——どうも実際に、ジャック、と名乗っているらしいが、彼がモリアーティと^{同門}だと考えれば、色んな事に筋に通るんだ。……ジャックが自ら《クラブ》に協力を要請したんだとすると、『クリア』だと言うのも納得が行くしな」

最後は独り言のように、アーサーは小声でつぶやいて、煙草の灰を灰皿に落とす。

一方、銀助は話の展開に付いていくのに必死だ。

「ど、同門って……催眠術の流派でもあるんですか？ それに、ちょっとしたツテって……なんで指揮官の名前まで知ってるんですか？ ロンドン中の新聞社が血眼になっても正体が掴めないでいる《ジャック・ザ・ナイトメア》ですよ？」

「あまり深掘りしない方がいいぞ？ ロンドンには、知り過ぎた人間を影から操って不幸にする、冷酷な魔女が棲んでいるって噂だからな。実のところ、ここだけの話だが、ただの噂じゃない」

「……………」

「とにかく、いまコナンが《ジャック・ザ・ナイトメア》と行動しているのは多分確実だ。そして《ジャック》にはメイドとターナさんを操った《ギアス》使いがいる。とすると――」

「……当然コナン君も何らかの暗示を掛けられている可能性が高い、ということですね？」

「ああ。問題は、モリアーティの《ギアス》と違って、ジャックの《ギアス》の正体がわからないことだ。どうすれば発動するのか。そして、どんなことが出来るのか」

「……普通の暗示なら、命令して言うことを聞かせるって感じですよね？」

「ああ。ただ、メイドもターナさんも、自分が誰かの命令に従っているという自覚はなかった。後になって思い出そうとしても、記憶はあるが上手く思い出せないと証言していたしな。その一方で、足音を殺す歩き方など、身体的な変化まで生じている。これも従来の暗示では考えづらいことだ。何より……あのときターナさんが口にした台詞だ。」

『これはしたり。失礼した』。

あの台詞は、普段のターナさんから出てくるような台詞じゃないし、あらかじめ指示されていた台詞とも思えない。やはり、これは《ギアス》だよ、銀助。超常的な――少なくとも、現在の科学では解明できない領域の技術だ」

「はあ……よくわかりませんが、厄介そうですね。その話が本当なら、上手くコナン君を助けられたとしても、下手をすれば助けた彼に寝首を掻かれることになりかねない」

「……ただ、メイドとターナさんの例を見ても、モリアーティの場合と違って、ジャックの《ギアス》は元に戻る。その条件も不明のままだけど、《ギアス》の効果を打ち消すことができるのは確かなんだ」

アーサーはそう言って煙草を灰皿に押しつけた。

銀助も肩を竦める。

「何はともあれ、まずはコナン君を連れ戻すのが先決ですね」

「だな。ただし、その際も《ギアス》の効果で抵抗される可能性が高い。強引に拘束する必要がある」

「コナン君、医学生のくせに鍛えてますからね。大変そうだ。とはいえ問題はやはり、いつ、

どこで、ですね。そこがわからないと、動きようがありません」

「このあとレストレード警部が、またロンドンの事件の記録を持って来るはずだ。ただ……それで《ジャック》たちの潜伏場所がわかるって確信は、正直ない。モリアーティの方も。二つの陣営が衝突するのは間違いないが、それがすべて闇の中で終わったときは……」

アーサーの声が沈む。そして、彼は縦るような視線を、《電気炉》に繋がる機器に向けた。

銀助がずつとチェックし続け、いまだに反応がない機器だ。

銀助は静かにため息を吐いた。

それから、意識して明るい声を出す。

「取りあえず、腹ごしらえにしませんか？ 実はターナさんがお茶の用意をしてくれるんです。

アーサー君もいかがですか？」

「……わかった。『腹が減っては戦はできない』だったか？ いまはニッポンの故事に習うよ。ただ……」

「はいはい、わかってますよ。反応が気になるんなら、私が見ていますから、アーサー君はひとまず先にー」

ーピピピピー

最初、その電子音がなんの音なのか、銀助はもちろん、アーサーすら気付かなかった。その後、アーサーは長椅子から飛び出して、《電気炉》に繋がる機器に齧り付いた。

音はすぐに止まった。

アーサーは機器を《電気炉》から外し、壁際の書棚からロンドンの地図を引つ張り出して、作業机の上に並べた。地図を広げ、機器を確認しながら、素早く地図上に円と線を書き込んでいく。

「……ア、アーサー君？」

「静かに！」

アーサーは何度も機器を確認し直し、定規を当ててペン先を右往左往した結果、地図上のある一点に、小さく丸印を付けた。

アーサーの背後から銀助がのぞき込む。

「……畏だと思っか？」

「……とりあえず、アーサー君の話聞く限りでは、向こうが私たちをいちいち畏に嵌めるとは思えませんがね」

銀助の率直な意見に、アーサーは深く頷いた。

「警部を呼ぼう。それから……コナンの馬鹿を迎えに行くぞ」

*

石壁をくりぬいたような小さな窓から、コナンはずっと外の景色を眺め続けていた。

太陽は西の地平に沈んだのか、いままさにロンドンに夜の帳が落ちている。気温もずいぶん下がってきた。

視線を落とせば少し向こうに、悠々と流れるテムズ河が見える。大小幾つもの船舶が行き交っているが、どの船も船灯を点し始めていた。ランタンの明かりが河面に落ち、船腹が掻き分ける細かな波の上でキラキラと輝いていた。

コナンがこの部屋に閉じ込められてから二時間は経つただろう。

ドアの外からはなんの物音も聞こえず、まるで一人中世の部屋に取り残された気になってくる。過去、ここに捕らわれた人々も、同じ気持ちを抱いたのだろうか。すべての人に忘れ去られ、世の中から自分が消えてしまう感覚を。

ロンドン塔。

かつてロンドンを守る城塞として建設され、王宮として活用されたのち、政戦に敗れた貴族や反逆者を収監し処刑する監獄となった場所だ。百年前の革命時にも、民衆が貴族を投獄するために使われた。現在はイギリス政府が管理しているが、長らく閉鎖され続けている。

いまコナンがいるのは、その中心に聳えるホワイト・タワーの一室だった。

「しがない医学生を閉じ込めるには、恐れ多い場所だな」

そう自嘲したとき、背後でガシャツと硬質な音がした。ドアを塞ぐ鍵が外れた音だ。コナンが振り返ると、ぶ厚いドアがゆっくりと開く。入って来たのはジャックだった。

「お加減はいかがですか？」

「腹が減った」

「そう言えば昨日の晩から何も食べていないはずですね。申し訳ありません。昨夜も言いましたが、食事に興味がないもので、つい」

そう詫びて、ジャックはいつもと変わらぬ様子で笑う。

昨夜身柄を拘束されたコナンは、そのままホテルの一室に監禁され、しばらく前にこのロンドン塔に馬車で移された。その際、コナンの側には昨日の女性とピーターが入れ替わりで付いていたが、ジャックが顔を見せたのは、昨夜のあのとき以来だ。

「ロンドン塔が昨日言っていた決着の場というわけか。またずいぶん大袈裟な場所を選んだな」
「人気が無く広い場所なので、都合が良いかと思ひましてね。以前から準備は進めていたんで

すよ。何より、裏切り者の叛徒を始末するには打って付けの場所です」

「……裏切り者の叛徒というのは、モリアーティのことか？ それに、昨日見せた、あの妙な力……ジャック。貴方はまさか、以前モリアーティの仲間だったのか？」

尋ねると、ジャックが浮かべる笑みに氷の冷たさが混じった。

「分不相応な知識は身を滅ぼしますよ？」

「まだ滅びずに済む道があるとは思ってなかった」

「ずいぶんと潔いことですが、本番はこれからです。準備は整いましたし、あとは、あの男をこちらに招待するだけ。その招待状も、間もなく届くころでしょう」

「あからさまな畏じやないか。のこのこ出向いてくるとは思えない」

「来ますとも。そのために骨を折ったと、先日も申し上げたでしょう」

涼しい顔で否定するジャックに、コナンは困惑を隠せない。

「なぜだ？ モリアーティは兄を殺した犯人じゃないのか？ 自分が殺した人間のーそれとも《ジャック・ザ・ナイトメア》の一員だった男の弟なんかを、なぜ気に掛ける？」

「ご自分が、モリアーティを誘き寄せる罠だと？」

「しらばつくれるな。俺はアーサーじゃない。自分に特別な何かがあるなんて思ってない。唯一あるのが兄の件ーモリアーティとの接点だ。だが、俺が奴を追うのはともかく、なぜ奴が俺に構う？」

死んだ兄は《ジャック・ザ・ナイトメア》の一人で、だからこそ敵対するモリアーティに殺された。ジャックはそう言ったし、その説明には説得力があった。

しかし、だとすれば、モリアーティがコナンのために明白な罠の中へ飛び込んで来るだろうという、ジャックの予測は理解できない。ピーターが率いていたチームのように、モリアーティは直接間接を問わず、何人もの《ジャック・ザ・ナイトメア》を手に掛けてきたはずだ。なぜコナンの兄だけが例外なのか。

「兄とー兄さんと奴の間には、何か因縁があったのか？」

コナンは鋭い眼光でジャックをにらみつけ、問い質した。ジャックはコナンの視線を受け止め、見返しながら、いつも通りの笑みを保持する。

ジャックの笑みは、彼の仮面だ。喜怒哀楽のすべてを、その笑みの向こうに隠して表に出さない。

「……今日は目を見て話すんですね。もう警戒するのは止めたのですか？」

「あまり意味がないと言ったのは、貴方だろう。質問に答えてくれ」

重ねて問いかけると、ジャックはもったいぶった仕草で肩を竦めた。

「我が敬愛する《嚮主》の名に誓って、ジェームズ・ワトソンを殺したのは、《教授》プロフェッサーを名

乗るあの男で間違いありません。二人の因縁は……我々のように《ギアス》に目覚めた者には、よくあること、とだけ言っておきましょう」

「……………」

結局真相を明かすつもりはないらしい。コナンは無言で拳を握り締めたが、やがてゆっくりと深呼吸して力を抜いた。

この男に憤ったところで仕方がない。ただ、諦めるつもりもなかった。謎は、己の手で暴けばいいのだ。必要なら、頼れる者の力を借りて……。

そのためにも、いまは考えることを放棄しないことだ。

「昨夜のあの力、《ギアス》だと認めるんだな？」

「ああ、うっかり口を滑らせましたね。まあ、《嚮主》の名に誓う以上、致し方ありません」

ジャックはあっさり認めると認める。あれが《ギアス》なら、コナンは次の瞬間にも、ジャックの意のままに動くかもしれないということだ。まるで遅効性の毒を飲まされたような気分だった。

ただ、

「なら、やはり貴方とモリアーティは、かつて仲間だったんだな。……そう言えば、ヘレン・ロイロットが言っていた。モリアーティは《ギアス嚮団》で《嚮主》の片腕にまで上り詰めたとー」

「おい」

その瞬間、禍々しく見開いたジャックの双眸が、憤怒に燃えた。コナンは本能的に、全身を萎縮させた。

「俗物が、知った風な口を叩くな。あの男は薄汚い奸計でのし上がったに過ぎない。本性を見せたいまは、ただの惨めな裏切り者だ。ヘレン・ロイロットだと？ 忌々しい雌狐が。生きていればこの手で、妄言を吐いた罪を償わせてやったものを」

ほとんど歯ぎしりせんばかりだった。突然の激昂にコナンは息を呑んだが、ジャックからは離さなかった。

これほど感情を顕わにしたジャックは初めて見た。それはつまり、さっき口にした台詞が、この男の「核」だということだ。

モリアーティが、裏切り者。《ギアス嚮団》の。そして、ジャックのこの態度。鈍い自分にも、両者の関係が見えて来た。

「……裏切り者を始末したあとは、どうするつもりだ？」

「もちろん、敬愛する《嚮主》の元に戻りますよ。いい加減、この陰気な街にもうんざりとし

ていたところです」

「モリアーティを殺しても、『解放者』は残るんじゃないのか？」

「そうですね。可能なら根絶やしにしたいところですが、あまり現実的ではない。『ギアス』がなければこれ以上は増えませんが、自滅を待つことになるでしょう」

「……俺はどうだ？ 用が済んだら殺す気か？」

「正直に言えば、状況次第です。もつとも、記憶は消させてもらいますよ。それなりに大きく記憶を操作せねばなりませんから、後遺症は残るかもしれませんが……不自由さには、すぐに慣れます」

「『ギアス』を使うのか？」

「まさか。記憶を操作するだけなら、暗示術で済みます。『ギアス』とは、『嚮主』より授かった神秘の技。崇高な目的以外に、軽々に使って良いものではありません」

「裏切り者の抹殺は、崇高な目的という訳か。暗示術というのは、催眠か何かか？ 『ギアス』とは何が違う？ そもそも、貴方の『ギアス』。あれは一体……」

昨夜ピーターが一瞬だけ見せた姿は、まるでジャックが乗り移ったかのようなようだった。それに、足音を殺す歩行法だ。そう言えば、あのターナですら、正気に戻るまでは足音を殺していた。真剣な面持ちのコナンを、ジャックは「おやおや」とおかしそうに笑う。

「何を企んでいるのかわかりませんが、『ギアス』についてこれ以上語るつもりはありませんよ？」

「……どうせ記憶を消すんだろ？」

「神秘の技だと言ったでしょう？ おいそれと口にすべきものではないのです」

「他の『ジャック』たちの記憶も消すのか？」

「ええ。もつとも、彼らには私が去ったあとでも、『ジャック・ザ・ナイトメア』として活躍してもらおう予定です。上手くすれば『解放者』の一人や二人は道連れにできるかもしれませんし、『犯人』が捕まった方が、世間的にも落ち着くでしょう？ もちろん、私のことは忘れてもらいますが。」

「……ああ、そうそう。」

アーサー・ホームズの記憶も消しておかねばなりませんね。彼の周辺人物も。特に、次女でしたか？ 仮にも新聞記者だ。土足で神域に踏み込むような真似は、万が一にもさせるわけにいきません。ホームズ家は不服に思うかもしれませんが……いまの時期なら目くじらを立てて事を荒立てもしないはずですよ」

「貴様……」

「おっと、いけませんね、ミスター・ワトソン。自棄になつては、どんな企みも成功しませんよ」

ジャックが冷ややかに微笑む。

たとえ《ギアス》や暗示術がなくとも、この男は強敵なのだ。また、彼の本当の目的が、ただただ「裏切り者の始末」のみだということもよくわかった。モリアーティを殺害することさえできれば、他はある意味「どうでも良い」のだろう。この男が無責任に力を振るえばどうなるか。コナンは背筋が寒くなった。

ただ……一方で自らの判断は正しかったという確信も得ていた。

散々迷った。しかし、ボタンを押したのは、間違っていないかったのだ。

「さて、さすがに長話が過ぎました。そろそろこの場所を指定した招待状も届いたところでしよう。付いて来て下さい。ここから貴方には、私と行動を共にしてもらいます」

「……このままでいいのか？」

「なんのことです？」

「なぜ俺に《ギアス》を掛けない？ 部屋から出すなら、当然そうすべきだろう」

ジャックの《ギアス》がどういうものかは不明だが、どうやらモリアーティの「人を変える」

《ギアス》とはかなり性質が異なる力のようなのだ。それを急いで知らねばならない。たとえば、使用回数や効果の続く時間、範囲。発動条件や成功率。

がー

「おや、ミスター・ワトソン？ 私が貴方に『まだ《ギアス》を掛けていない』と考える根拠はなんですか？」

「なっ」

ジャックの指摘に、コナンの血の気が失せる。

彼の言うとおりであった。ジャックは記憶を消せる。なら、とつづくに《ギアス》を掛けられており、そのときの記憶を消されている可能性は十分にあった。現に、ステイプルトン家のメイドも、ターナも、ジャックの《ギアス》に掛かっていた自覚はなかったのだ。むしろ、これだけ側において反抗的な態度を取っているコナンに対し、ジャックが《ギアス》を掛けていない方が不自然だ。

「ですから、ここから先は勝手な行動は慎んで下さい？ 何が『トリガー』になって、不本意な結末を迎えるかわかりませんからね」

「……………」

どうやら自分は甘かったらしい。これでコナンは、心理的に手錠と足枷を付けられたに等しい。反撃の機会は、大幅に奪われたと言える。

しかし、

「……勝負はまだ、決まっていないぞ」

振り絞るように告げると、ジャックは慙鬱な物腰でも隠しきれない嘲笑を滲ませた。彼の笑みが崩れたのは、その直後だ。

ドーンー！

どこからか大きな爆発音が響き、石造りの建物が細かく振動した。

ジャックが顔色を変えて「なに？」と顔を逸らした。

同時に、何かに集中する顔つきになる。なんだと思ったが、すぐにわかった。

どこか遠くで笛の音が鳴っている。それも、モールス信号のように、細かく規則的に途切れながら響く笛の音だ。ジャックはその音を聞くために、耳をそばだてているのだ。

「……爆破？ 襲撃？ 馬鹿な。早過ぎる！ それに……自動機巧人形！？ バスカヴィル家の『ナイトメア』か？ どうしてここに！」

ジャックが唾然として叫ぶ。

コナンは湧き上がる昂揚を抑えつつ、そっとポケットに手を入れた。

ポケットの中には、ひとつだけボタンの付いた、軽く、小さな機械があった。いつだったか銀助と会話していた際、マリーが依頼人を連れて来たためとつさにポケットに入れて、そのままになっていた機械だ。

稼働時間は、良いと二十秒弱。

だが、追跡するのではなく、居場所を知らせるだけなら十分だ。問題は、コナンが合図を送る可能性に気づき、それを受信するために準備を続けていたかどうかだったが……答えは出たらしかった。

もつとも、ひとつ問題が片付いた途端に次の問題が生じる辺り、いかにもあいづらい。

「……いまの、ちゃんと爆発『させた』んだろうな。『した』んじゃないくて……」

ひとつだけ確かなこと。

やはり彼の相棒は、「探偵」には向いていない。

*

日中雲に覆われていた空は、少しずつ晴れ間をのぞかせていた。

濃紺色をした生まれた夜の夜空に、白と灰色の雲が立体的な斑模様を描いている。いつになく眩い月が、雲の向こうに見え隠れしていた。

「本当に、ここで合ってるのか？」

「ビーコンの信号は、間違いなくここからだ。コナンが消えて五日。《ジャック・ザ・ナイトメア》は特定の拠点を作らず動いていたが、ここに来てビーコンが作動した。コナンが作動させたんだ。となれば、《ジャック》とモリアーティたちの全面対決は、ここでーロンドン塔で行われるという、コナンからの合図と見て間違いない」

月夜に聳えるロンドン塔をにらみながら、アーサーは断言した。

クラウスがやれやれと苦い顔でロンドン塔を見上げ、銀助は誰か側に潜んでいないか、冷や冷やしながら辺りを見回している。

いま三人がいるのは、ロンドン塔の西側。テムズ河の河岸へ向かう小路の途中だ。ロンドン塔中央のホワイト・タワーだけでなく、敷地を囲む城壁も目視できる。歩いてもすぐに着く距離だった。

三人は、クラウスが手配した屋根なしの二輪馬車トラップに乗っていた。御者はクラウス。アーサーは座席の上で、広げていた地図を畳んだ。

同じく座席に座る夏目が、不審そうに顔をしかめる。

「しかしですね。《ジャック・ザ・ナイトメア》がコナン君からビーコンを取り上げて作動させたってこともあり得ますよ？」

「それはないんじゃないか？ あいつらの狙いはモリアーティって野郎の方なんだろう？ わざわざ俺たちを呼び出すとは思えんぜ」

「ですけど、全面対決という割りには、静か過ぎませんか？」

「まだ始まってないだけだ。嵐の前の静けさってやつだろうよ」

「だったら、ここにいるのは危険ですよ。ロンドン塔の《ジャック》たちは外を警戒してるはずですし、モリアーティの一味はこれから塔に侵入するってことでしょう？ 鉢合わせでもしたら、目も当てられない」

「かといつて、『いつ』を動かすと、もっと目立つぞ？ やっぱり置いていくか？」

「うーん……散々嫌がっておいてなんですが、いざ対決の場となると、頼りたくはなっちゃいますね……」

夏目は、座席トに同乗している巨大な人影を横目に、そう言って苦笑いを浮かべた。

巨大なフード付きマントに覆われているのは、他でもないアーサーの『お土産』、改造を終えた自動機巧人形だ。その威容は起動前でも十分で、リビングに置くには物騒で仕方なくとも、いまこの場では実に頼もしかった。

何しろ、人殺し集団と犯罪組織の抗争に首を突っ込もうとしているのである。対人戦専用の

《ナイトメア》は、まさに打って付けの戦力だった。

「どうする、アーサー？」

クラウドが指示を仰ぐと、アーサーはしばし無言でロンドン塔を眺めてから、
「始めよう」
と応えた。

「《ジャック》とモリアーティたちは、どちらも極めて特殊な集団だ。全面对決とはいえ、それがどんな形の争いになるか、正直想像できない。それに、いざ二つの陣営がぶつかれば、コナンは人質として使われるだろう。救出が困難になるし、人質としての効果が出ないようなら、その場で殺されることもあり得る。モリアーティたちがまだ到着していないなら、ある意味好都合だ」

「……ですが、少なくとも《ジャック》の方は、準備万端で待ち構えてるわけでしょう？
いくら自動機巧人形があるとはいえ、ほんとに私たちだけで乗り込むんですか？」
「……ああ。ただし、正面から乗り込むのは、僕だけだ」

「おいつ、アーサー」
「警部。自動機巧人形を操作できるのは僕だけだ。僕が囮になって向こうの注意を惹く。その間に警部と銀助は、コナンを探して欲しい。コナンを確保でき次第、脱出する」

「だ、大丈夫なんですか？」
「やってみるさ。それより、銀助たちも気を付けてくれ。ジャックの《ギアス》がどんなものかわからないし、コナンにはすでに《ギアス》が掛けられている公算が大きい。場合に拠っては力尽くで……理想は気絶させて連れ出してくれ。《Eソード》の扱いは理解できたな？」

「実技の予習はしてませんけどね」
「僕だって、自動機巧人形に乗るのはぶつつけ本番だ。本来ならこういうのこそコナンの役目なのに……ええい、くそつ。あいつが帰ってきたら、山ほど文句を言ってる」

実際、自ら囮を買って出ながらも、アーサーの声は微かに震えていた。荒事はいつも相棒任せだったのだから無理もない。

ただ、アーサーは震えつつ、怯む様子は見せない。覚悟を決めている。クラウドが鼻を鳴らし、銀助が再び苦笑した。

「コナン君がどこにいるかはわかりませんか？」

「生憎、あのビーコンの精度ではロンドン塔のどこかまではわからない」

「幽閉するための部屋なら事欠かないからな。手当たり次第に探してたんじや、夜が明けちゃうぞ」

「今回ジャックは守勢に回ってる。なら、一番確率が高いのは中央のホワイト・タワーだ。侵入するにはどうやっても中庭を突っ切る必要があるから、接近する者がいれば必ず見つけられる」

「……そんなの、どうやって見つからないようにコナン君を連れ出すんですか？」

「だから僕が囷になるんだ。それに、コナンさえ確保できれば、見つかったって構わない。あとは強引に逃げ切るさ」

アーサーの台詞に、クラウスがやれやれと慨嘆する。

「なんとも出たとこ勝負だが……まあ、考えてみればいつものことか。ただ、場所が場所だし、時間も浅い。騒げば市警もすぐに飛んで来るぞ？」

「《クラブ》に『ロンドン塔』と電報を打っておいた。つまり、後始末については考えなくていい」

「それは……逆に失敗できないな……」

「その電報、ここに来る直前に頼まれたやつですね？ 『ロンドン塔』だけで通じるんですか？」
「それどころか、すでに監視下にある可能性だって考えられる。この上、余計な横槍が入らないことを祈ろう」

「……日本の神様でも、祈りが届くことを祈りますよ……」

三人はそれぞれに軽口を叩き合った。

そして、全員が少しの間無言になったあと、互いの顔を見合わせ、頷き合った。

アーサーが自動機巧人形のマントを剥ぎ取る。その背中には、急造で取り付けられた操縦席があった。

「《シユテイン》 起動」

アーサーが操縦席に跨がって、自動機巧人形を起動する。すると、彼を背中に乗せた異国の鎧武者が、ぐいんと座席から腰を上げた。

《シユテイン》という命名は銀助だ。バスカヴィル家で魔物とされた自動機巧人形に、ニッポンの魔物の名前を付けたいとアーサーが頼んだのである。銀助は、日本で最も有名な魔物――鬼の名前をアーサーに教えた。正確には「シユテン」と発音するらしいが、アーサーの言い間違いが、そのまま正式名となっている。

アーサーの《シユテイン》が起動したのに続いて、クラウスが御者席から降り、拳銃を取り出して銃弾を確認する。

最後に、銀助が馬車を降り、慣れない手つきで《Eソード》を振るった。

「警部。さっき説明した《Eロール》を」

「わかった。こいつだな。にしても、まさか警部にまで昇進したつてのに、泥棒の真似事をする日が来るとはな」

「そうだ、銀助。言い忘れていたが、いまその《Eソード》は、当たればちようど気絶する程度に、電気ショックの出力を調整してある。電源を入れっぱなしにしても稼働音はほとんどし

ないし、半時間はショートせずに済むはずだ。侵入したら、先に電源を入れておくといい」
言われた銀助は、ピタッと動きを止めた。

目をぱちくりさせながら、「……はい？」と手にした《Eソード》を凝視する。

「……電源って、このスイッチのことですよね？」

「そうだ。扱い方は理解したんだろ？」

「スイッチ……を押して半時間経ったら、どうなるの？」

「ショートして壊れる。もしくは、負荷が蓄積されて爆発する」

「……ええと、ベーカー街を出てから、どれぐらい経ちましたっけ？」

「《Eロール》を作るのに一時間以上かかったからな。だいたい半時間と少し……おい、待て。

銀助？」

「いえ、その……てつきり、最初に動かしてから使う物だと……」

銀助が《Eソード》を手に、恐る恐る座席のアーサーを見上げる。

その瞬間、長時間の負荷に耐えかねた《Eソード》に、

ピシッ、

と亀裂が走り、激しいスパークが発生した。

アーサーは口を利く間も惜しんで、とっさに《シユテイン》を操作。馬車の上から、ぬつ、と腕を伸ばし、《Eソード》をつかみ取って、思い切り放り投げた。

一応テムズ河を狙ったつもりだったが、生憎ぶっつけ本番だ。ギユンギユンと回転する《Eソード》は、剣身に眩いスパークを走らせながら、月夜に光の尾を曳いた。

大きな放物線を描きつつ、ロンドン塔の城壁に落下する。

ドーンー！

そうして、戦いの火蓋は切って押された。

*

「やれやれ。主役が到着する前に、もうパーティーが始まってるじゃないか」

黒塗りの四輪馬車ランドローから降りて彼方のロンドン塔を見やりながら、モリアーティは、さも愉快そうに言った。

雲間から注ぐ月明かりの下、青白く浮き上がるロンドン塔から、火の手が上がっている。夜風にたなびく細い煙が、戦場の狼煙のようだ。まだボヤ程度だが、まだまだ大きく燃え上がる

だろう。

戦いの夜が始まったのだ。

「メリーウエザー邸の再現だな。あのときの警告は無視されたみたいだが……つまらない因縁が、実に楽しいな。パーティーになった」

背後では、大佐が下す号令と、それに応える配下たちの応答が聞こえる。真冬の夜風と、戦いの熱気。今回は大物も用意した。モリアーティは堪えきれない様子で、満面に笑みを浮かべる。

その笑みは、享樂的で背德的、そして獰猛だ。

「行こう。今度はロンドン塔でひと暴れだ」

*